



喫茶餘錄初編

下

791

フ

1-2

大武



A791
1
1-2

喫茶餘録下

杳實老人 著

武野紹鷗ハ文龜二年大和の奈良にて生じ和泉の堺にて長なると母吉野乃藏王権現に祈りてゆた子あり因り童名を吉野松菊丸とす後新五郎と稱し仲村と名づく二十四歳にして京都に至り宗悟宗陳共ニ珠光の才を承り上巻の卷に在る乃二居士小就茶法を受け又西三條右大



喫茶餘録の初編下

もろ十三年享祿三年實隆公乃吹拳よりて
因幡守に任し従五位下を叙す同四年三十歳に
て剃髪も法名紹鷗とす四條蛭子堂の隣に
住次因すその家小額を掲げて大黒庵と号す
普通国師に帰依し俗弟とす晩年塚に
ゆり居住す禅を修し心意を澄しめ茶を
嗜んが生涯は樂しむこの時茶礼盛に行はる

紹鷗宗易利休居士が茶事に器量けり事を知り
其術を傳ふ珠光の後紹鷗を茶家れ道統と
す殊に袋棚を六乃とす

我名をば大黒庵とよぶやも
うろふまを秘事哉このま

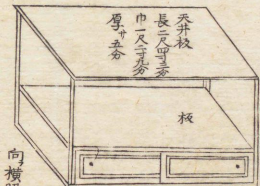
とよめ弘治元年十月廿九日歿し五十四歳に
一閑紹鷗居士と号す織田有樂が崇めて京於
建仁寺境内正傳地に碑を建つ同所小有楽乃

碑あり 武野系圖及び諸書を
集めて補綴す

紹鷗袋棚之圖

檜溜塗

惣高 壹尺九寸五分



此間守五分
此所一分五分

房上二金半

地板

長二尺四寸五分

巾一尺三寸

厚六分

戸力子五分

堅腰板

向横胸板

因^{カキ}子^{カキ}あ^{カキ}る^{カキ}久^{カキ}紹鷗乃父ハ新立即信^{カキ}久^{カキ}ハ久阿波^{カキ}長^{カキ}
三好家^{カキ}子^{カキ}信^{カキ}武田伊豆守信光乃後^{カキ}乃^{カキ}道遥^{カキ}
院殿の近習^{カキ}子^{カキ}後退隱^{カキ}と^{カキ}ころの^{カキ}と^{カキ}氏^{カキ}
を武野とわ^{カキ}つ^{カキ}む

種^{カキ}あ^{カキ}つ^{カキ}同^{カキ}く^{カキ}武田と^{カキ}末^{カキ}子^{カキ}と^{カキ}つ^{カキ}

わ^{カキ}れ^{カキ}く^{カキ}ぞ^{カキ}今^{カキ}ハ^{カキ}整^{カキ}く^{カキ}ね^{カキ}つ^{カキ}れ^{カキ}る^{カキ}か

く^{カキ}た^{カキ}つ^{カキ}又^{カキ}黄山谷^{カキ}が^{カキ}詩^{カキ}子^{カキ}

江南野水碧^{カキ}於^{カキ}天^{カキ}

中有白鷗、開似我

といふを愛し、一閑齋紹鷗と号し

末後

曾弥陀結無慧印

宗門更轉活機輪

量知茶味與禅味

吸盡松風心不塵

と偈を作き、青雪葉書

○武野宗瓦名ハ為久新五郎と称し紹鷗乃子

父の跡を継ぎ茶人の名あり天正九年濠田信長公

本教寺門流と合戦ありあり為久は内色の

風説を信じて為久を殺さんと以故小沢持徳

退く信長公为久の家財を没収せしむこの時

家傳乃文書繪旨珍器名書等大半殆失以爲

久大沢あり出家し水宿庵と号し信長公生害

の後旧從安堵も後秀吉公及び秀頼公子仕へ

大坂より死す方寸斎光徹宗尾居士初の法名ハ宗貞

塚と号す武野系図

正船曰紹鴻ま子孫我

尾藩奉仕しちハ為久の子新右衛門仲定仲定と茶名あり臺子の法とすと

ちゆめと久今色終連綿と

○千利休ハ堺今市の人初田中氏後子とあらむとむ

抛筈斎と号し又利休と号し俗名与四郎先祖ハ

室町家小仕へく同朋役をつとめ名を千阿弥と云

千氏とす子後宗易と改む普通国師剃度の才子なり

茶法を紹鷗及比北向道陳堺船松の共向乃家住す改

名を鷗の致後宗匠と稱す利休利髮以前の師なり聞く其道利休小至りて

大成も茶法を以てゆめ信長公小仕後小豊臣

大関に仕命を受く茶法をわらむ法盛り

行ハ列国の諸侯と重せられ百世茶法の宗師と稱

せらる元龜年中

正親町上皇の勅によりて茶法を製して奉る

上皇あまを瘡く居士の跡を 賜ふ秀吉公

より三千石の地をうけり乃時天下大半平治し

秀吉公殊々茶及び山の多し明智光秀と一戦此

柳りも山崎に茶室 正徳曰妙喜庵の茶室是なり僧功
叔ハ妙喜禅庵と号し山崎錢

原の空寺乃側あり秀吉公と張近し殊々恩遇せし

公との意はいたらぬ時利休は茶室をつくらせし

献て専のかはら木を 北条政の
時あり

にも茶を催し肥前名護屋の朝舞政にきも山林を造

り茶亭は構へ北野松原に茶室を建大茶の會と名

づけ和漢乃雅器をうさり京南都或ハ堺近国遠国

茶をたむはもの見せしむ是れ利休未乃吉公の

命を受く事をつとめり實に茶道中

興の祖ふて古今獨歩の宗匠なり落髪の後

古溪和尚 大徳寺の聚光院乃住なり是より千氏代
小謂
聚光院は且那うき々禪学を多伝

力をつくりて禅意の玄妙を窮む資財を捨く

紫野乃山門を修く諸尊の像を安置しその

像はのほろり己が肖像をわく大間をふり

とひひく罪と云因う自教と天正十九年二月十九日歳七十餘あり家母聚光院小弄る碑面利休宗易居士といぬ

正詔曰六々青雪叢書中小散在せざるを蒐輯補綴せざるを以下七條諸書に載る所抄出して利休の言行事實を連沓拏々

○茶は乃四あり能和能敬能清能寂なり是利休茶祖珠光東山殿に答ふる語に據る立る所ありと

茶祖傳○正詔曰能乃字巖味ハニヘ

○信長公へ宗易を召出され臺子の桑乃を見たりひく天王寺屋宗及堺の富商津田宗達の子更由者利休と同一く秀吉公に仕へ三十石を領せし法眼和尚位に擢らる大通庵を堺に造立して父の菩提所とす春屋因師を請ひて初代乃祖とすの手前より宗易れ手前ハ略々三むるハいふとありれを宗易對へく君ハ珠茶湯をこのまを人バ末も母もわをびぬらん古法乃めくくどむひくく今の女ハ人氣根も

弱くはれりてまろひかむ故に茶への二袋を
 一ツかゝ九袋内長緒ナガオを短緒ミダカよりまちを明アケ茶
 への出へれりてまろひかむ故に茶への二袋を
 五よきやうに製ツクりてまろひかむ故に茶への二袋を
 どもひくるとぞ貞要集。正郭曰宗及の
小傳ハ諸書を參校して加ぬ
 ○利休わるとき道喜ミチキ餅屋モチヤ方カタの歎なげふ
 於オケ於ケ登ノボる茶一徳トクうとて源氏漢ゲンシカンと
 宗直ムネナカは固カタ危ヤブうまうとて

とかまゝに納ノメりてまろひかむ故に茶への二袋を
 乃於ノケ於ケをどうとてまろひかむ故に茶への二袋を
 とれどろき席セキをへりてまろひかむ故に茶への二袋を
 以モてまろひかむ故に茶への二袋を
 源氏讀ゲンシヨミの宗直ムネナカと松永マツナガ貞徳サダトク長頭チヤウトウ唐カラと称ナヅケす
 和手ワテをこの中院チュウイン飛鳥井トビトリイ菊亭キクテイ公等キョウトウ及細川ホシガハ西崎サイサキ小室コムツび
 又マタ俳借ハイカケ名ナわり著述シヤクシュツの書カキモノ乃事ノコトなりこの人源氏物語
 戴恩タイオン記キ等トウりてまろひかむ故に茶への二袋を
 を好ヨクしてまろひかむ故に茶への二袋を

原叟正紹曰宗左と稱し覺齋号一又朝良の系

湯流芳軒号も千氏代々の宗匠し

花入をくけ納良をいそぐ利休と八休ふりそ

一奥あり千氏茶書。正紹曰貞徳の
小傳戴恩記跋文を抄畧す

○極寒の茶乃湯利休客をひひに出る

て香爐へ香を炷き袂へ待合へ出乃香炉を

上客へをも折節上客も持参の香炉小香爐

炷居たりそまを利休へもす利休死て袂へ入也

席へ入は持参の香炉かざり何れその香炉を床

よりわろ主人は香炉をらば付しとぞ以上客ハ

志野宗悟ありといひ傳ふ同上

○針ヤカシ及宗真名あり茶人。老後ふそ以内救奇者利

休織部茶尾茶い中かわくねるかへ宗真

答る織部茶尾茶い中かわくねるかへ宗真

付け板おとはものおとくも五中さる事ゆと感

ト入る利休手茶尾茶い中かわくねるかへ宗真

又仕也ア又とめ又免不申の利休も亦八九急を離
きたりよう常々も語るといひ傳ふ 貞要集

正徳曰右一條の文本書に従う改めず

○堺南宗寺下南坊宗啓正徳曰智唱り
利休比の人なりの堂腰掛小利

休相談く鑑板を叩其文左ふ載も 同上

壁書

一賓客腰掛小乘同道人お掃く板を打て案内を
報じへ

一手水の筆をん改をまゝとていゝひを肝

要

一店主出待く客菴へへ茶飯乃法具不

偶美味り又や落地の桐石天然の趣をん

を不の筆は是より遊子帰り去

一沸湯松風小及び港多致く客再来湯のみ

火お乃差とやう筆多罪

一庵外小をいゝ女筆乃雜話古来禁之

茶録 初編 下

一 質去歴然の玄功言令色をへべしす
一 舍の始終二時に色べし伏但法活清快

時うのりハ判外

右七條も兼去大注中 嗜茶革亦可忽オノセ
者也

天正十二年九月上三

南坊 宋易

○利休一板起書

度ニ我然くこそあくの智者達乃沙汰ノ
中さうく歎言此茶湯ホとけし又學問ホ
舍良んそさうくの心茶湯にもわく伏只の
どれ濁をやめむ為るハ湯が涌ぬれば必やむ
ぞくたらひくまゝのむ外不別乃子細ハハ
但救身とふるハ我拘人奇癖ハハハ
そ中子ことり也ハ外ノ奥も手筆を存せむ
二人の癖にもつて救身者といふも

興大余録の刀削下

を信ぜん人たりし和漢の学を好すといふ
とて一文不知乃愚鈍者になりて尼入るの
無智乃字に同じくして收奇を振舞をせし
只一向子湯をこみべし

○小堀政一（小堀 政一）位下遠江守近江小室一万石を領
も（小堀 政一）柔術をうけ終り宗匠となり
風流雅趣（小堀 政一）一古子（小堀 政一）冠（小堀 政一）識鑿（小堀 政一）に長じり和漢を
名器（小堀 政一）題（小堀 政一）この人小定といひ古田重勝（小堀 政一）佐久間真勝（小堀 政一）

小堀政一の三人

殿乃師範（小堀 政一）とちり政一（小堀 政一）春屋澤庵（小堀 政一）江月の諸

師（小堀 政一）に参禅（小堀 政一）剃髪（小堀 政一）して宗甫居士（小堀 政一）と号し紫野
に孤蓬庵（小堀 政一）を造立（小堀 政一）とて以て孤蓬庵と号せ

古田重勝（小堀 政一）は従五位下（小堀 政一）織部正印（小堀 政一）斎と称す茶法を

宗易（小堀 政一）小受（小堀 政一）と百ヶ条を著し（小堀 政一）重勝（小堀 政一）小授と

織田有楽（小堀 政一）と同じく宗匠と称し春屋師（小堀 政一）小参

用ひど新しきとてもさあまうまハまろ
べうう大粒多きやううやむべううはまろあま
をいハず一卵のたきやううもつふび色も
ちやうてあり末く子孫子傳ハるたをわすれ
一飯をむむとくも志うたきハ早瀬の鮎水
底ハ鯉とくも味わづべううもまき乃落山
路志苦うづう明香こね人をまの葉風共
釜の小えれく鉄る事やう同べう

正船曰の第一事情をつてせうとふべうめ
こね人をまの葉風共釜煮るたやううな
ううべうとむべうふはううう葉カの入るの
わさううげをうてぬ

因まあま或人まこの事をやうううふかふま
うううう葉の一た城おんま君父ま忠孝といハ
あまぐうういとんともあうあんやう年以おを
ひうう明暮こね人をうううう茶にカの

入たりびふハ中々君又忠孝家々竹葉れろ
そにぢりじやむようちりめよころ以奉
たりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢり
ぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢり
の意をゆさうとみふべ

正艸按ぞふふこぬ人のぬ文字ハ文字ぢりんを
あゆまう傳へるぢりんとおこるぢりど本書試
まぢりバとまにまぢりたぢり

○宗易歌

柔乃湯とたた湯とまゝ茶とまゝ
のむぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢり

宗啓奇に

花紅葉とゆやとまゝぢりぢりぢりぢり

たぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢり

宗易わす時細川幽齋へ柔乃湯露地の心と通
ふべぢり古哥ぢりぢりぢりぢりぢりぢりぢり

トて

かぢの葉乃をミぢぬううかちうつを

奥山里の乃がミびーま

け哥やあふらんといれくー又古田織部ハ

夕月夜海をらーミる本は留るが

この發白れんを落地をらー杯免あつーとえん

小堀壺州ハ

見とせバ花をぬ葉もなるといけり

うゝのらゆ屋はのき甚ゆふぐま

ふ乃哥茶は湯の心も度地もかち人可く常了

いそれーとぞ 貞要集

○橋立の壺シテ名益キあり外エありーを利休所也

て正根コといふチを使ひーとらまよまら

二根を清元マあり 兼ーとらま

らーとらまへやちーたーの壺

とらまら 徳川ーとぞ 千代茶書

○き州の朽へ小使人の宗旦の娘を富子と
境界はもあつべし 利休乃母を言ふははるべし

金一ツをくむ茶の湯はちよりのを

よる所乃をきみはむをうけし

金ちくハ波加あつともまきあつて

それあを茶子ハ日本一をき

ついでわるる具をも朽へく

ちよりのをまき人ともあ

有るをまき言ハハちよりのをまき

とる茶乃ゆあつともまほあつれ

○細川三斎の曰筈なははまぢり子ああるもかヤヤ新
下地窓シタ小ちうわひくちよ母に

あふこはまぢり子あある伊移イコまれ

いよくそれをまびあつて

正能マサノ曰この言ハ恋乃うまをとり出く示

一さるぢりシタ佐サとん恋子思ひ乃せあつともあ

へいも爰一ハヤ一 糸趣のまびまに通

ハ一まをささるん

○古々白炭を枝炭化粧炭とも云糸の湯不用んがまやせさるにハわら灰むくハ横山といふところより貢物せりといひ傳ふ

いふ一いふやけを以て之辨る

よと山むく乃糸のしるさよ

也より 以上青雲叢書

○茶人系圖

正龍白珠光以来乃糸人の教一時乃隠る

つくりつて今さらりて亦不ハ流昧の

統を挙て枝葉にいろを別て一奏を

擧びてねをみ奏まハちりし月

珠光より利休小いりてまは道統ハ前

擧る條中ハ詳たををりて利休以

後のハハちりてまきぬ

田中与兵衛嫡子

不審庵

拋筌齋

利休居士

田中氏

後二十改

天正十九年辛卯二月二十八日没

七十四歳

宗易二男
宗淳

少庵

俗名四郎左門

慶長十九年甲寅九月七日没

宗淳子
宗旦

今日庵

咄々齋

元叔

又元伯

万治元年戊戌十二月十九日没

八十一歳

宗旦三男
宗左

江岑

逢源齋

堪笑軒

寛文十二年壬子十月二十七日没

宗左子
宗佐

良休

随流齋

元禄四年辛未七月十九日没

宗佐養子

宗左

原叟

覺々齋

派芳軒

実久田宗金子

貞享十五年庚戌六月二十五日没

原叟子
宗左

如心齋

丁々軒

天然

初宗貞

寛延四年辛未八月十三日没

如心齋弟
宗左

啐啄齋

仲翁

隱名

初宗貞

文化五年戊辰十月六日没

六十五歳

啐啄齋養子
宗左

了々齋

好雲軒

初

宗貞

実久田宗溪子

文政八年乙酉八月七日没

五十七歳

了々齋養子
宗左

吸江齋

初

達藏

実久田宗也子三了々齋甥

宗且三男

○宗室

仙叟 玄室

元禄十年丁丑正月廿三日没

十氏本家ノ裏ニ住ス今日庵トテ宗且ノ隱居所ナリ
コレヨリ本家ト隱居ト両家ニワカル

本家ヲ表流
別家ヲ裏流ト云

仙叟子

宗室

常叟 白北庵 俗名宗安

室永五年戊子五月十四日没

常叟子

宗安

泰叟 六閑齋

享保十二年丙午八月二十八日没

宗安養子

宗乾

竺叟 晏々齋 俗名政之助 実ハ原叟ニ男

享保十八年癸卯二月二十五日没

竺叟養子

宗室

一燈 勿々齋 又玄齋 梅合堂 実ハ原叟ニ男

一燈子

玄室

石翁 不見齋 寒雲

享和元年辛酉九月廿六日没

玄室子

宗室

柏叟 認得齋

柏叟子

玄室

宗且二男

○宗守

一翁 似休齋 官休庵 閑翁 故有テ家ヲ為ス

千氏別家ノ祖 上京武者小路ニ住ス

延宝三年乙卯

日者食録 (補綴)

一翁子
宗守
文叔
宝永五年

文叔子
宗守
静齋 真伯 幼名重治 卯
延享二年乙丑三月廿八日没 五十三

静齋子
宗守
直齋 賢叟 幼名久之丞
天明二年壬寅二月六日没 五十八

直齋養子
宗守
一賢齋 溪閑 休翁 実 川越兵庫頭子

一賢齋養子
宗守
好々齋 宗什 宗屋 実 石翁玄室 末子

宗易門人
○_○○_○數内紹智
燕庵主人 劍仲齋 教中齋 又 教隱齋
寛永四年丁卯五月七日没 八十七

千氏ハ上京ニ居數内ハ下京ニ居住ス故ニ時々
千氏ヲ上流トシ
數内ヲ下流トス

劍仲子
紹智
燕庵主人 真翁 後了智ト改
承應四年乙未正月六日没 七十八

真翁子
紹智
燕庵主人 劍翁
延宝二年甲寅十一月十三日没 七十六

劍翁子
紹智
燕庵主人 劍溪 後 宗億ト改
正徳二年壬辰五月七日没 五十九

劍溪子
紹智

燕庵主人 而空 不住齋 後竹心ト改
延享二年乙丑十月廿三日没 六十八

而空ラ子
紹智

燕庵主人 竹陰 比老齋 宗堅 雲脚道人
寛政十二年庚申七月三日没

竹陰子
紹智

燕庵主人 竹逸 桂陰齋

正勲ト白右ト四流ト八千氏トの流トちトうトがトぬトまトりトめトふトつトら
祢ト拳ト々ト

信長公之弟

〇〇 織田有樂

後四位下侍從 長益
俗稱源五郎 有樂軒ト号ス 又如庵

落髮トノ融ト覚トト云

茶法トヲ利休トニ受 利休没後宗匠トト称ス

有樂流トノ祖 元和七年辛酉十二月十三日卒 七十七

主膳正貞隆之男

〇〇 片桐石見守

従五位下 貞昌
宗関ト号ス

茶法トヲ古田織部トノ門人菜山左近トニ受

又利休ト并遠州ニモトナブトト云

遠州卒後多賀左近トト舟越吉勝トト貞昌トト

三人トヲ宗匠トト称ス
石州流トノ祖

喫茶録

延宝元年癸丑十月廿日卒

正始シ曰ク右小シ举ケ了ス兩家リョウカ今イマ從シ連綿レンメン一ニ流脉リウマク之ノ繁セン

衍シ也ト

喜大夫之男

〇〇小堀遠江守

後五位下 政一 初名作助

宗甫居士号ス

又洞達

茶法ヲ古田錄部ノ受ケ和漢名各ノ品ヲサカス

速州流ノ祖

茶事ノ師タリ

正保四年丁亥二月六日卒

六十九才

正始曰此茶道乃流脉之亦溯蔓也

〇〇久田宗榮

宗易門人

房政 俗稱新八郎

薙髮ノ宗榮ト号ス

母ハ宗易ノ妹

茶道ノ宗易ニ受遂ニ茶事ヲ耽トス

久田流ノ祖

寛永元年甲子三月六日没

六十六才

宗榮子 宗利

受得齋ト号ス

俗稱利兵衛

茶道ヲ宗旦ニ受

貞享二年乙丑十月七日没 七十五才

宗利子 宗全

得与齋ト号ス

俗稱ヒナ屋勘兵衛

茶道ヲ江峯ニ受

宝永四年丁亥五月六日没

六十一才

宗全子 宗也

半床庵ト号ス

又不及齋

松慶ノ弟

延享元年甲子正月十三日没 六十四才

契本余録 〇 切崩下

御教録
宗也子
宗玄
芳烟卜号ス 又厚比齋
享和二年乙酉正月十二日没 五十七才

宗考明
宗參
松雲 追遠居又閑齋 宗也二男 宗悅ノ男
寛政十三年庚申十月十二日没 五十一才 以下道系猶説了

宗考
耕甫
森齋卜号ス 宗也ノ子
文政三年庚辰二月七日没 六十九才

耕甫ノ子
宗隆
文政七年甲辰 月 日没

宗隆ノ子
耕隆
文政七年甲辰 月 日没

原叟門人
堀内仙鶴
寛延元年戊辰閏四月廿日没 八十才

弘道ノ子
宗心
明和四年丁亥正月七日没 四十九才

方合齋 宜翁
宗完
不識齋 宗瑛

忍齋門人
川上不自
孤峯 又 不羨齋 和 宗雪

宗雪

宗什

石塚宗通以下 別卷詳之

初編下

御教録
才三

明齋錄鏡
被録下

原叟明人

○松尾宗二

樂只齋 嘉隱軒 松尾流之祖
宝曆二年壬申九月二日没

宗五

獸古齋 樂只軒
明和八年辛卯十一月廿五日没 七十二

宗政

一等齋
享和二年壬戌九月十三日没 六十

宗俊

不管齋

宗五

不俊齋

宗二 玄々齋

正詔曰右三氏ノ類多ク彼を省キク是を載ス此をノ
此流を汲者多クハ筆に任セクもセらる

喫茶餘録下終

跋 張務進

一日被鴻漸我珠光乃同癖者數十百人詣余
家叢香寶箱許一禮而各總無所言余倚側
將語焉而假寐適覺而後竟違無人唯案
頭一線篆煙裊、颺耳偶鞅掌風塵不果語
翁騎月而翁出一小冊似余曰此編成于繡
帙之外服茶之解因題啣茶餘錄余受之
一觀死前未謝人之皆載在編中余於是

契於餘錄 勿漏 跋

拍掌云果然。翁詰之則以實告翁。公倒
指愕然曰某日寢吾起筆之日也。即德通
遽上水以授末。清嗜茶之輩有緣衆生亦
得遇此功德。被末謝之。德亦復大歡。在
于崇文政己丑重九後三日。

男精一拜書



愛 知 県



1103284304